第4室　仏具　展示解説

N-242　舎利塔（しゃりとう）

釈尊の遺骨とされる舎利を奉安する金銅（こんどう）製の容器で、基壇上に伏鉢（ふくばち）形の塔身を置き、火焔宝珠（かえんほうじゅ）付きの相輪を備えた方形造（ほうぎょうづくり）の屋根を戴（いただ）く宝塔形に作られています。『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』（N-18）によれば、もとは法隆寺東院（とういん）の舎利殿（しゃりでん）に安置されていたようです。木製の基壇の裏の銘文から、法隆寺の役僧であった覚厳（かくごん）によって保延４年（1138）に造立（ぞうりゅう）されたことがわかります。

N-300　葛箱（かずらばこ）

もとは被蓋造（かぶせぶたづくり）の箱の身に当たる部分で、いまは蓋を失っています。細い葛を並べ、その周囲に細く裂（さ）いた葛の皮を巻きつけながら編み上げて各面を作り、口には竹製の縁を、細い籐（とう）を巻きつけて留めています。全面を蘇芳（すおう）で赤く染めてから漆を塗り、側面には二重菱（にじゅうびし）と四菱繋（つな）ぎの文様（もんよう）を編み出しています。達磨大師（だるまだいし）所用と伝えられる「袈裟（けさ）」（N-35）が納められていました。

N-279　壌鉢（そくはつ）

肩がやや張りますが、口縁の窄(すぼ)まり方が弱く、なだらかな輪郭をみせる器形の鉢です。壌(そく)は、型に麻布を押しあて漆で貼り重ねて成形する技法で、中国では夾紵(きょうちょ)と呼ばれ、すでに前漢の時代(前2世紀)から行われていました。わが国では奈良時代に仏像の製作に盛んに用いられ、乾漆(かんしつ)とも呼ばれています。この技法で製作された鉢としては唯一の遺例で、大変貴重です。

N-278　木鉢（もくはち）

木を轆轤(ろくろ)で挽(ひ)いて成形し、麻布を貼った上に下地を厚く施し、漆を塗って仕上げた鉢です。肩が張り、口縁が窄(すぼ)まり、底が尖ったいわゆる鉄鉢形ですが、いずれも穏やかで、全体に円(まる)みを帯びたなだらかな輪郭をみせます。鉢は僧衣とともに、師から弟子へと与えられる品の一つで、仏法の象徴として重視されたほか、仏・菩薩(ぼさつ)に飲食(おんじき)を供(そな)えるのにも用いられました。聖徳太子とも関係が深い、達磨大師(だるまだいし)所用との伝承が付されています。

N-14-付属　仏名経箱（ぶつみょうきょうばこ）

長方形、印籠蓋造（いんろうぶたづくり）、木製、黒漆塗（くろうるしぬり）の簡素な箱で、永治元年（1141）に法隆寺に施入（せにゅう）された仏名経 3 巻を収めていました。蓋裏に応和３年（963）の線刻銘がありますが、その書風は平安時代の末から鎌倉時代頃を示しており、この箱もその頃に製作されたと考えられます。角のとれた穏やかな造形も、その年代に

ふさわしいといえます。

N-284　如意（にょい）

　如意は、「孫の手」から転じた仏具で、これを用いると「意の如く」になることから命名されたと考えられます。羅漢図（らかんず）などにそうした用途での使用の様が表されていますが、実際には法会（ほうえ）の際にこれを手に執（と）り、威儀（いぎ）を正すのに用いられました。本品は水牛の角（つの）製で、上端の爪頭（つめがしら）と呼ばれる部分が小さく、全体に細身の作りとなっており、奈良時代以前の特徴が顕著に現れています。

N-241-1　百万塔（ひゃくまんとう）

　天平宝字８年（764）の藤原仲麻呂（恵美押勝〔えみのおしかつ〕）の乱の後、称徳天皇（在位 764～770）の発願（ほつがん）で滅罪と鎮護国家のために製作された、木製、轆轤挽（ろくろびき）の三重小塔です。相輪部分を蓋にして塔身上部から縦に穿（うが）たれた筒状の孔（あな）には、年代の明らかな現存世界最古の印刷物として著名な陀羅尼（だらに）が納入されていましたが、法隆寺献納宝物中の 48 基の百万塔ではすべて失われているのが惜しまれます。